

## 浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解の意義

李 尚 珍

### The Significance of the Asakawa Brothers' Viewpoints on Korea

LEE Sang -Jin

#### abstract

The purpose of this paper is to clarify the "Significance of Asakawa Brothers' Understanding of Korea" by analyzing the characteristics and the formation of the Asakawa brothers' theory of Korean Craft Art. The older brother Noritaka Asakawa (1884-1964) and the younger brother Takumi Asakawa (1891-1931) recognized the importance of the traditional arts and techniques, which had been used during the daily life of the Korean, as an important cultural element of Korean art. Moreover, such ideas also gave them an opportunity to set out a ground for their theory of the Korean craft art.

There appears to be significant progress upon the relationship between Korea and Japan today, yet it would be too much to say that a thorough understanding had been genuinely realized between these two nations. As mentioned earlier, the continuing bad feelings between these two nations, which arise from stereotypes and prejudices, may be a significant cause of the lack of understanding that continues to persist today.

I'd like to propose the Asakawa Brothers' understanding of Korea as a viewpoint which is different from the previous ones; that is, a viewpoint which contradicts the negative images and history which were brought about by Japanese colonial rule. Along with the thorough understanding of one's own culture such an attempt will enable, perhaps a better understanding of the foreign culture may become possible for both the Japanese and the Koreans.

Keywords : Asakawa Noritaka, Asakawa Takumi, the colonial time, Korean craft art, viewpoints on Korea

#### はじめに

1996年3月に浅川巧の日記(1922年の1年分、1923年の7月、9月分)の公開とともに、『浅川巧全集』(高崎宗司編、草風館)が刊行されると、韓国と日本において浅川伯教(1884~1964)・巧(1891~1931)兄弟への関心が急速に高まった。詳しい事例については本文中に述べるが、その理由は日記と書簡、著作などから、兄弟が日本による植民統治期の朝鮮に暮らしながら、伝統工芸研究を通して他者としての朝鮮理解を深めていく様子がこれまで以上に明らかになったからである。

伯教は小学校の教員(のちに彫刻家、陶磁研究者となる)として、巧は造林技手として植民地朝鮮で暮らしたが、「白樺」派の柳宗悦(1889~1961)<sup>(1)</sup>と出会った後、本格的に朝鮮伝統工芸研究に取り組むようになり、朝鮮伝統文化の固有性と朝鮮の主体性を認識するようになった。それは、兄弟が当時の日本人の朝鮮蔑視観に反発し、現地での「生活者」としての視線が朝鮮人との交流に向いていたからこそ可能となった。

---

キーワード：浅川伯教、浅川巧、植民統治期、朝鮮伝統文化、朝鮮理解

\*平成13年度生 国際日本学専攻

これまでの兄弟に関する先行研究には、まず、兄弟の朝鮮における活動について初めて注目した高崎宗司の著書『朝鮮の土となった日本人—浅川巧の生涯』（草風館、1982年・増補3版2002年）を挙げるができる。本書において、高崎は兄弟の生涯と朝鮮における活動や兄弟を偲ぶ今日の追悼活動を、多くの文献と談話を中心に総括的な分析を行なった。次に、神田健次は「朝鮮の土となった日本人キリスト者—浅川巧の足跡を求めて—」（『関西学院大学人権研究』第1号、1998年3月）において、巧の日記の分析を通して彼の朝鮮観形成の思想的背景としてキリスト教に注目し、新しい研究の視点を提起した。そして、韓国人李秉鎮が、『「白樺派」における他者としての<朝鮮>—柳宗悦と浅川巧の場合—』（東京大学博士学位論文、2002年）において、「白樺派」である柳の朝鮮認識に影響を与えた巧を「京城白樺派」として取り上げた。本論文において李は、柳と巧、この二人の朝鮮との関わりを分析することによって、「白樺派」の朝鮮認識における新たな視点を提示した。筆者は、お茶の水女子大学大学院の『人間文化論叢』に発表した「浅川巧の『朝鮮観』—植民地時代におけるその業績を中心に—」（2002年）、「浅川巧—その異文化理解モデルの今日的意義—」（2003年）、「キリスト者浅川巧の苦悩—その宗教観を中心に—」（2004年）、「浅川伯教と朝鮮—植民地期の朝鮮陶磁研究を中心に—」（2005年）及び「浅川伯教の朝鮮工芸論」（2006年）において、兄弟それぞれの朝鮮観を取り上げ、その特質について問題提起をした。

しかし、巧の評価に対しては憂慮する意見もある。まず、梶村秀樹は「柳宗悦に朝鮮を紹介した林業技手の触発力に富む評伝」（『朝日ジャーナル』1982年9月10日号）において、「著者の巧まざる筆が、巧を遠まきにして、『浅川さんという人は朝鮮人から神様のように慕われていたようですね』とか、浅川巧は『朝鮮人以上に朝鮮の心が分かっていた』とか、気楽に賛美している日本人たち（その中にはある意味で柳もふくまれる）のある種のいやらしさを浮かびあがらせてもいることを、指摘せざるをえない。これらの言辭は、期せずして朝鮮人をおとしめていることによって、浅川巧の本意にも反しているのである。苦渋のすえに創造された浅川巧の魅力的な生き方にぶらさがって、安値に免罪符や日本人としての救いを手に入れるわけにはいかないのである」と述べている。次に、出川直樹は『民芸—理論の崩壊と様式の誕生—』（新潮社、1989年）において、「わが国では韓国に対し柳や浅川を真に朝鮮民族や芸術を理解した存在として誇ることが多いがそれで良いのだろうか。誇り得る所もあろう。が、その限度を見定めておくことが今の私達に必要なだと思う」と主張している。そして、李秉鎮は前述の論文において、特に巧に対する研究態度に「ヒューマンズ的な解釈や浅川巧の功德、遺徳を偲び、後世に語り継ぎ、日韓交流親善を図ろうとする善意だけが重んじられることになりやすい」として「韓国人からの感動を前提とする浅川巧像は、日本において聖域化される可能性がある」と指摘した。しかし、これまでの先行研究や兄弟に関する見解においては、兄弟が朝鮮の日常的な習慣や生活様式を身につけ、現地での「生活者」としての体験によって日常生活から朝鮮文化の独自性を認識したことが、韓国と日本においてどのような意義を持つのかについてほとんど考察されていない。

筆者は、兄弟の朝鮮伝統工芸研究が韓国において工芸研究の第一級史料としての役割を果たしたこと、ならびに現地での「生活者」としての体験が日本において韓国理解のモデルとなり得ることを実証することによって、「免罪符」「聖域化」の抽象的イメージではなく、韓国と日本の相互理解の指針として提示できる、と考える。

以上のことを踏まえながら、本稿では、韓国並びに日本に在住する兄弟と関係の深い人たちとのインタビューを通して得られた重要な証言、アンケート調査結果を分析し、韓国と日本における兄弟の朝鮮理解の意義を明確にしたい。

## 一、韓国における意義

兄弟の朝鮮伝統工芸の研究活動が、韓国において貴重な研究史料であり、その活動の中にみられる兄弟の朝鮮理解の視線は、日本人のもう一つの朝鮮観を明示していることに注目し、関係者の証言や関連書を考察してその意義を明確にする。

### （一）伝統工芸研究の貴重な史料

伯教は1914年から33年間、巧は1915年から17年間、韓国に暮らしながら、「朝鮮民族美術館」の設立（柳宗悦との共同活動）や朝鮮伝統工芸関連の著述活動に積極的に取り組んだ。これは、フィールドワークすなわち

古物屋や窯跡の現場に出かけ、直接見て触れるという活動と兄弟自らの衣食住生活に用いるという体験が中心であった。フィールドワークが中心だったのは、当時、韓国人にも日本人にも注目されなかったために、白磁や家具などの生活用具としての伝統工芸品について関連史料がなく、名称のみならず「もの」が消滅していく危機にあったからである。兄弟は、フィールドワークや著作を通して、特に当時の韓国人に伝統文化継承の必要性を訴えた。論文「李朝陶器の価値及び変遷に就て」（『白樺』1922年9月号）及び著書『釜山窯と対州窯』（彩壺会、1930年）など伯教の陶磁関連著作は全37編あり、フィールドワークを行なった窯跡は全679ヶ所（『李朝陶磁窯跡一覧表』『世界陶磁全集第14巻』河出書房、1956年）にも及ぶ。一方、巧には『朝鮮の膳』（工政会、1929年）『朝鮮陶磁名考』（朝鮮工芸刊行会、1931年）など全15編の著作がある。

兄弟の研究について、最初にその意義を論じた韓国人は、徹新高等普通学校の教師・洪淳赫<sup>ホンスンヒョク</sup>であった。洪は1931年10月19日の『東亜日報』に「浅川巧著『朝鮮の膳』を読んで」を掲載して、『朝鮮の膳』によって「朝鮮のものをいっそう価値あるものとして理解するようになった」こと、「これだけの材料と研究を、私たちに提示したことだけでもありがたく、恥ずかしいことである」と述べ、史料としての意義を強調した。そして、洪は「過去のものを知らず、また忘れてたりする若者たち」への「新しいものを模倣するより自己の良いものを固持せよ」という巧のメッセージが込められていることを指摘しながら、若者に対して伝統文化の優秀性の認識を呼び掛けた。それは、洪が、若者の自文化への誇りが民族の独立と主体性の認識につながることを確信していたからである。

1945年に韓国が独立し、韓国戦争（1950～1953）後の1960年代になると、韓国人による伝統文化研究に対する意欲が高まるが、それに関して残された史料はほとんどなかった。そのなか、1970年代になると、梨花女子大学の裴満美元<sup>ペマンソン</sup>教授と韓国国立中央博物館の鄭良謨<sup>ジョンヤンモ</sup>元館長が伝統工芸研究に取り組み、主な参考史料として浅川兄弟の著述を取り上げた。

まず、裴は著書『李朝家具の美』（새글社、1975年）の「Ⅲ章 小盤の種類と名称」において、『朝鮮の膳』を取り上げ、「盤型」の「円型」（137頁）と「用度別型」の「酒案盤」「公故床（番床）」（138～139頁）の説明に参照・引用している。裴は2004年9月15日のインタビューに答えて、1960年に梨花女子大学に就任した際には「学生に教える、見せる伝統家具もなく、与える資料もなかった」と回想し、『朝鮮の膳』について次のように述べた。

巧先生の本が出版されてからはほぼ半世紀後に出ただけに、「精確な知識の書」という側面では、『李朝家具の美』が『朝鮮の膳』に勝る部分があります。たとえば盤型などについての調査はより広汎に行われているということですね。しかし、今日ではすでに見られなくなった半月盤のような珍しい型の膳などについては、『李朝家具の美』も『朝鮮の膳』にそのほとんどを負っています。いずれにしろ、『李朝家具の美』の「第二編 膳」の引用されている文献の中で最も多く引用されているのが『朝鮮の膳』です。『朝鮮の膳』が今でも、第一に参照されるべき、第一級の文献とされているのです。

次に『朝鮮陶磁名考』については、柳が序文の中に「今後朝鮮陶磁史に関心を有つ者は、座右から之を離す事は出来ない。（中略）在来の幾多の名称が修正せられ、それが本来の内容に立ち帰るのみならず、又之によつて研究に幾多の新しい暗示を受けるであらう」と予言した。また、鄭が2004年9月15日のインタビューに答えて、次のように言明した。

この著書は歴史的な記録です。名前、用途、絵があるので生活用陶磁器がどのように使われたのかを知る重要な資料です。このようなことを思いついたのが不思議で仕方ありません。普通、本を出すとしたら論文などを書き、自分の名を残そうとしますね。実質的有用的なものを詳細に解説して本を出すということは珍しいです。日常生活用品を研究して本を出すことは愛情がなければできません。学術的な論文より価値のあるものです。一般的に関心のない雑器に愛情を持ち、調査して本を出すということは、真の偉い学者です。

一方、伯教の著書『釜山窯と対州窯』については、鄭が「歴史的なことを考えると、釜山の倭館で、朝鮮が材料（土、窯）を提供してくれて、陶磁器を製作して日本に持っていきました。朝鮮戦争の際に多くが破壊されてほとんど

残されていません。伯教先生がその破壊の前に調査・研究したことに大きな意義があります。伯教先生の本『釜山窯と対州窯』は陶磁器と現地調査に関する研究に優れていたと思います」とその意義を力説した。

そして、『釜山窯と対州窯』が現在の韓国の若い陶芸家の中でも広く読まれていると、海剛陶磁美術館の2代目の柳光烈館長が2005年1月4日のインタビューのなかで答えている。初代館長の陶芸家故柳海剛は1921年、伯教の紹介によって、京都に青磁製作の修業に出かけたこともある。陶芸家であり、教育家でもある柳館長は、韓国全土の窯跡の調査記録は浅川兄弟のものが初めてであり、当時の韓国人が記録したものはないと証言し、自らも窯跡の発掘調査に取り組み、分院里（京畿道）で5ヶ所、大田（忠清南道）で3ヶ所を新たに発見したと述べた。

さらに、徐萬基は著書『探訪韓国陶窯址と史蹟』（成甲書房、1984年）において、「広州付近は解放前（終戦前）日本人学者浅川伯教・巧兄弟らの調査によって退村面、南終面、実村面、草月面、都尺面などから約六十ヶ所の陶窯址が発見され、また近年になり韓国の学者崔淳雨、鄭良謨氏らの調査結果によって約二百五十ヶ所の陶窯址があることがわかった」と述べている。徐は、巧の「六十年前踏査した略図を片手に李朝窯蹟踏査」のために分院の窯跡地を回った。そして、「浅川巧の踏査記に登場する窯場のある村と地元の古老たちに旧地名を聞きながら」、巧が「道馬里（トマリ）は陶村（トマリ）と考へることも出来る」と書いてあることについて、「도마지峠の由来も陶磁器からであろう。道馬里も、韓国語で도마울（陶の村）を指すことがわかる」と、その検証の記録を残している。

最後に、鄭は1961年から陶磁器研究の基本である窯跡めぐりを始めた自分の経験を回想しながら、兄弟のフィールドワークによる朝鮮伝統工芸研究は「朝鮮に対する愛情がなければ続けることができなかった」と評価し、伯教の蒐集品であった「染付辰砂蓮華文壺」（現在大阪市立東洋陶磁美術館所蔵）が韓国にあるならば、国宝として指定される可能性が高いと指摘し、彼らの蒐集活動の意義をも評価した。

以上のように、兄弟の現場主義に基づくフィールドワークを中心とした朝鮮伝統工芸研究の成果は、現在の韓国における研究史料として活用されるほど、その正確さに優れていた。そして、戦後の反日感情などとは関係なく、兄弟の研究活動が韓国において認められたが、それは韓国の研究者たちの体験に基づく発見であったし、現代における伝統工芸研究の再出発点であった。

## （二）日本人のもう一つの朝鮮観

兄弟は朝鮮人との積極的な交流や衣食住の実体験をもとに日常生活における工芸について関心を高め、さらには周りの朝鮮人たちからも兄弟の実践的かつ積極的な姿勢が信頼されていった。当時、多くの日本人にとっての朝鮮が、「日本の力」をもって「文明化」しなければならない植民の対象に過ぎないと考えられ、さらに「傍観者」としての在朝鮮日本人と朝鮮人の交流・交際などは考えられなかったことに対比して、兄弟の朝鮮理解は日本人のもう一つの朝鮮観として注目されつつある。

1960年代、日本による植民統治の補償問題のために韓日会談をめぐる反対運動が激しくなり、反日感情も高まったが、1966年に巧の元職場の国立林業研究院（当時、林業試験場）では、職員一同によって巧の墓に「功德碑」が立てられた。巧の墓は現在、ソウル市忘憂里墓地公園にあるが、そこには日本の植民統治に抵抗した独立運動家たちの墓が多く、彼らと並んで日本人の墓があるということは異例のことである。子孫のいない巧の墓は、国立林業研究院の趙在明院長が「親戚」として墓地公園の使用許可を得ている。そして、趙とともに巧の同僚・韓寿業氏（1903～1968）の息子・韓相培氏が墓の管理をしている。

韓は2004年9月13日のインタビューに答えて、幼い頃から両親から巧について聞かされていて、植民支配者としての日本人のイメージはなく、むしろ自分の親、親戚のような身近な存在であるという。そして、巧の墓を自らの意思で管理している韓は、毎月の墓参りが親に会いに行くようなことであるとも述べた。これは、当時の巧と朝鮮人との交流には、巧の朝鮮人理解だけではなく、朝鮮人の巧への理解があったことと、その交流が当時の時代的限界を克服して、相互理解を可能にしたことをよく表している。その相互への思いは韓の両親から韓へと受け継がれ、時代と国を超えて今日につながる普遍的な人的交流の一面をみせている。

巧の朝鮮理解が伝えられたもう一人は、安貞順夫人である。彼女は、故金成鎮（1910～1992）氏が伯教から預かった巧の日記とデスマスクを高根町に寄贈した人である。安夫人が1996年2月に金の意志を尊重し、兄弟の

故郷に日記などを返したことをきっかけに、「浅川伯教・巧兄弟資料館」設立が進められ、同年11月に、巧の日記や著書（『朝鮮の膳』『朝鮮陶磁名考』）、論考などが収録された『浅川巧全集』（高崎宗司編著、草風館）が刊行された。安夫人は2005年1月5日、筆者のインタビューに答えた。それによると、植民統治期の日本人によって朝鮮美術工芸品が日本へ流出されている様子を見て、金は危機感を覚え、自国文化保護のために蒐集に専念した。古物屋で伯教に出会い、李朝陶磁器を譲り受ける際に巧の日記を預かったが、1950年6月25日に韓国戦争が勃発し、南への避難を余儀なくされた際にも、生活のための家財道具などの荷物は持たず、巧の日記だけを背負っていったと語った。当時は、日本語で書かれたものは軍や警察に没収されるので、金は新聞紙と朝鮮紙で重ねて包み、家族にも触れさせなかったという。その後、金は韓国文教広報委員会の文化財担当として勤務しながら、文化財保護に専念したとのことである。筆者が、2006年4月4日に安氏宅で行ったインタビューの際に確認した金の蒐集品には、膳や筆筒、器などの工芸品が多く、日常的な生活用品の中に自文化の伝統の美を認識していたことが分かった。金は、自国文化理解を通して、兄弟の異文化としての朝鮮理解を受け入れることができたのである。そして、三人の朝鮮工芸という共通の理解要素は、金によって守り続けられ、韓日両国の後世に伝えることを可能にした。

実際、韓国では、兄弟の朝鮮理解を通して、植民統治の被支配側としての一方的な歴史認識ではなく、特に若者に対して日本人のもう一つの朝鮮観の再考を呼び掛けている。それは、次のような梨花女子高等学校の取り組みや高等学校の教科書にみられる。2002年3月4日のソウルの梨花女子高等学校の校報『겨울 (鏡)』に、趙斗漢元教師の寄稿文「朝鮮の土となった日本人—浅川巧」が掲載された。梨花女子高等学校は韓国の独立運動のために殉死した柳寛順女史の母校であり、彼女の命を奪った日本に対する否定的なイメージは強いはずであるが、未来の友好的な韓日交流のために山梨英和高等学校との姉妹校締結など、韓日の相互理解に積極的である。そのなか、趙は外国学校との交流教務を担当したことをきっかけに、ホームステイ実施などを通して、山梨英和高等学校の生徒や教員との交流を通して、山梨出身の浅川兄弟への関心を深めていった。趙は、兄弟の朝鮮理解を生徒たちに伝えることによって、植民統治期における日本人のもう一つの朝鮮観を見出すことのできる手がかりを提供したのである。生徒たちへのインタビューによると、兄弟の朝鮮理解を通して韓日の近代史を政治的状况のみならず多角的に考察してみたいという意見が多かった。そして、そのインタビューの中には、日本による植民統治を侵略として直視しなければならないという意見もあり、政治的な面における認識にはいまだ課題が残されている。

2003年3月、韓国では初めて高校の歴史教科書『韓国近・現代史』（(株)두산<sup>トサン</sup>）の「歴史の中の人物」（241頁）欄に、巧と柳宗悦が「朝鮮の陶磁器と民芸を愛した二人の日本人」として紹介された。巧に関する内容は次のようである。

浅川巧は朝鮮の陶磁器を研究した兄の勧めで朝鮮に渡り、朝鮮総督府の山林課と林業試験場に勤務した。文学と美術・音楽を愛し人文的教養が高かった彼は、朝鮮の陶磁器に心酔し、全国の窯跡を歩き回り、『朝鮮陶磁名考』という名著を残した。彼は朝鮮式の家屋で朝鮮服を着て暮しながら朝鮮人の芸術魂を持って生きた日本人であり、朝鮮の魂と歴史を抹殺しようとした日本帝国の植民政策を批判した。1931年に植木日の行事を準備する際に、急性肺炎にかかりわずか40歳で亡くなったが、彼の葬式は遺言によって朝鮮式に、朝鮮人によって行なわれた。生きて朝鮮人になれないなら、死んで朝鮮の土となろうとした浅川は忘憂里の共同墓地で韓国の愛国志士たちとともに眠っている。彼の墓碑石には「韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人、ここ韓国の土となる」と刻まれている。

この教科書の執筆者の一人である崇実大学大学院の柳永烈教授は2005年1月5日のインタビューに答えて、「数年前だと韓国の教科書に、日本人に関するこのような記述はできなかった。しかし、最近では韓日両国の人々が友好的な関係を望んでおり、変わってきている。特に韓国の若い世代に、近代史における韓日関係の友好的な視点を提供することは非常に意義のあることで、今後の両国の交流にも役立つと思う」と述べた。

2005年9月には高崎宗司著『朝鮮の土となった日本人—浅川巧の生涯』が1996年9月の一度目（나눔<sup>ナヌム</sup>出版）の韓国語翻訳出版に続き、二度目（호영<sup>ヒョヨン</sup>出版）の翻訳が出版された。二人目の翻訳者・梨花女子大学通訳翻訳大学院の金順姫教授は「あとがき」のなかで、巧が「自己の価値観によって相手〔朝鮮〕を計らず、ありのままを

受け入れた」「正しい日本人」であると述べた。

ここで注目すべきことはまず、伯教より巧への関心が高いことである。それは墓が韓国にあり、韓国人によって守られ、さらに日記公開によって巧の率直な朝鮮理解が日本人のもう一つの朝鮮観として積極的に受け入れられているからである。そして、これからの韓日の交流を考える上でも、巧と朝鮮人との交流や相互理解は両国の共通のテキストになり得るからである。

## 二、日本における意義

兄弟の朝鮮伝統工芸の研究活動は、日本において異文化（＝韓国）理解モデルとしての意義を持つ。本節では、〈浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会〉の参加者と山梨県立農林高等学校、山梨県立北杜高等学校、山梨英和高等学校の生徒や教員を対象としたアンケート調査の結果を分析し、検証する。

### （一）異文化理解モデルとしての認識

1931年4月2日に巧が亡くなると、1926年から1940年までの15年間を京城帝国大学教授として朝鮮で過ごした安倍能成は『京城日報』に「浅川巧さんを惜む」（1931年4月28日～5月6日、1934年の中等学校教科書「国語六」には「人間の価値」と題して一部改稿して収録された）を連載し、巧が「人の気づかぬ朝鮮人のよきを見出され」「朝鮮人の心を掴んで」いたと記している。<sup>(2)</sup>そして、長い間、交友があった柳宗悦は「編輯余録」（『工芸』1931年5月号）に、巧が「朝鮮の事を内から分つてゐる」て、さらに「朝鮮を愛し朝鮮人を愛し」「朝鮮人から愛された」と強調した。<sup>(3)</sup>安倍と柳は、巧と朝鮮人との交流の目撃者として、国家の政治的社会的状況にとらわれず、人と人の交流が成し得ることと、特に朝鮮と日本の両国間の相互理解が可能であることを確認し、巧を異文化理解モデルとして最初に認識したのである。

1946年11月に伯教は日本に戻るが、健康を害したことによって、積極的な朝鮮関連の研究活動はできず、お茶や俳句などに専念する時間が多かったが、1964年1月14日に80歳で亡くなる前に『李朝の陶磁』（非売品、1956年）、『李朝陶器編—白磁・染付・鉄砂』（平凡社、1960年）を出版した。

兄弟が亡くなると、『浅川巧著作集』（八潮書店、1978年）、高崎宗司著『朝鮮の土となった日本人』（初版、草風館、1982年）、李進熙の「ソウルに眠る二人の日本人」（『季刊三千里』1987年春号）などによって、在朝鮮日本人としての兄弟の活動が紹介された。そして、1991年3月、兄弟が生まれた高根町五町田に「浅川伯教・巧兄弟生誕の地」の記念碑が建立されると、地元を中心として兄弟への関心が高まり、1996年3月に巧の日記が故郷の北杜市高根町に寄贈されると、6月9日には「浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会」が創設された。その偲ぶ会では、毎年研究者の講演や演劇・ビデオ上映、写真展などを開催して、異文化理解モデルとして兄弟の朝鮮理解を多方面に教示している。

2001年7月18日に「浅川伯教・巧兄弟資料館」が開館され、巧の日記や伯教の陶磁作品などを常設展示し、日本人の韓国理解への手がかりをも提供している。2004年6月には、山梨英和中学校の梶村彩が2002年の夏休みの自由研究の成果として、『日韓交流のさきがけ浅川巧』（揺籃社）を刊行した。梶村は高根町出身で、巧の小学校の後輩でもある。そして、梶村は地元での情報収集を通して、巧への関心を深めていき、韓国の巧の足跡を訪ね、関係者の話を聞きながら、直接「自分の足で、自分の目で、自分の肌で、韓国を感じてくる」<sup>(4)</sup>ことによって、日本のみならず現在の韓国に伝わっている兄弟の朝鮮理解の普遍性を認識したのである。2005年には、日本において初めて中学社会の歴史教科書（『未来をみつめて』教育出版）に「外国から愛された人々～杉原千畝（1900～1986）と浅川巧」<sup>(5)</sup>が紹介された。特に「朝鮮には学ぶものなどないと思っていた多くの日本人とはちがって、浅川は朝鮮の白磁（陶磁器の種類）に魅せられたのでした」<sup>(6)</sup>と、当時の日本人との違う朝鮮認識を強調した。

日本において積極的な活動を展開している「浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会」（1996年6月9日創設、会長故大柴恒雄、2005年4月1日再構築、現、会長清水礎太夫）である。偲ぶ会は「浅川伯教・巧兄弟資料館」を中心として展覧会や講演会を開催し、異文化＝朝鮮・韓国理解のモデルとしての兄弟について広く伝えようと尽力している。

2005年6月5日から8月4日までの特別展示会「韓国の陶磁器121点—浅川巧の『朝鮮陶磁名考』に載った多種多様な陶磁器たち（韓国ソウル市在住鄭好蓮女史寄贈コレクション）」を開催し、現在の韓国人陶芸家たちによつ

て制作されたものであるが、巧が愛用したり、関心を持って蒐集したりした生活用品としての陶磁器に触れる機会を提供した。

2006年6月4日から8月16日までの特別展示会「写真で回想－浅川伯教・巧兄弟」（浅川文彦氏・鈴木有二氏・趙在明氏提供）では、植民統治期の朝鮮がわかる写真が展示され、衣食住の生活や工芸品市場の様子などをうかがうことができた。そして、北杜市たかね図書館との協力で同年7月16日から12月17日まで（第3日曜日）に「浅川兄弟講座－浅川兄弟ってどんな人？」を講師14名による全7回の講座を開いた。講座では、兄弟の朝鮮観やキリスト者としての兄弟、韓国と日本における兄弟に対する思いなどを紹介するとともに、個人製作のドキュメント（『白蓮の恋』早稲田大学韓国人留学生金度亨製作）の上映会も行い、多方面における兄弟への理解を深めた。

2007年6月3日から8月16日までの特別展「瀬祭です」<sup>(7)</sup>（浅川兄弟関連資料展）においては、韓国と日本で発表された兄弟に関する323点の資料（そのうち新聞記事158点、著作165点）を展示し、兄弟の朝鮮理解を韓日両国の人々が時代と国を超えて共有することを試みた。

## （二）アンケート調査結果にみるその意義

ここで筆者は、日本における兄弟の朝鮮理解の意義が異文化理解モデルにあることを検証するために、2007年6月3日の〈浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会〉（参加者のうち185人）と、6月1日から26日にかけて山梨県立農林高等学校（71人）、山梨県立北杜高等学校（34人）、山梨英和高等学校（73人）の合計363人を対象としてアンケート調査を実施した。

アンケート調査は兄弟のことを知っていることを前提条件として、まず、山梨県居住者を中心に全国から関心のある人々が集う偲ぶ会の参加者を対象とした。次に調査対象とした高等学校は、積極的に授業や講演会などで兄弟について取り上げている巧の出身学校（山梨県農林高等学校）、兄弟の出身地の学校（山梨県立北杜高等学校）および伯教の妻たか代の出身学校（山梨英和高等学校）である。このように偲ぶ会の参加者と高等学校生徒とは、年齢、ゼネレーション、立場など違いの多いグループではあるが、一般的には広く知られていない〈浅川兄弟〉についてのアンケート調査のため、限定された調査対象の選定となり、調査対象が大雑把なグルーピングになったことは否めない。しかし、本アンケート調査の目的は、兄弟の朝鮮理解が異文化（＝韓国）理解モデルと成りえるということを検証するためのものであったので、あえて、兄弟をどこまで知っているかというところまで問うことはしなかった。50代～80代（167人、90.3%）が中心となった偲ぶ会と10代の高等学校生徒たちの意見には、韓流ブームや歴史認識の影響など、世代による相違が見られるので、あえて区別して結果を分析した。なお、偲ぶ会と高等学校生徒たちの意見には、韓流ブームや歴史認識の影響など、世代による相違が見られるので、あえて区別して結果を分析する。問1）から問4）は以上の性別や年齢などに関する質問であるので省略する。

問5) 浅川兄弟についてご存知の方はどうして知りましたか？	偲ぶ会		高等学校生徒	
	人数	割合	人数	割合
イ) 山梨県内の新聞やテレビなどで知った。	41	19.7%	6	3.1%
ロ) 高崎宗司著『朝鮮の土となった日本人－浅川巧の生涯』を読んで知った。	19	9.2%	2	1.3%
ハ) 浅川伯教・巧兄弟資料館で知った。	43	20.7%	18	9.3%
ニ) 知人に教わった。	55	26.4%	15	7.7%
ホ) 学校で（先生に）教わった。	0	0.0%	146	75.0%
ヘ) その他	40	19.2%	7	3.6%
ト) 今日の偲ぶ会に来てはじめて知った。	10	4.8%		
合計	208	100%	194	100%

問5) では、兄弟に対する認識度について尋ねた。知ったきっかけについて、偲ぶ会では、「知人に教わった」と答えた人が26.4%で一番多かったが、それは山梨県地元におけるネットワークによる情報交換や兄弟の出身校の授業における紹介などによって、情報が広まっているからである。回答者のなかには、配偶者や孫などの家族から聞いたという人も多かった。まだ高等学校では教師からの一方的な情報によって知ることが多く、「学校で」知ったと答えた人が75.0%であるが、ここでは教師の影響力の大きさも重要である。今回の調査における教師32人のアンケートは少数の参考意見とするが、そのなかには「日韓交流の象徴的な存在」「実例」として兄弟を取

り上げることによって身近に韓日の歴史を考えようとする注目すべき試みがあった。ここに教育現場における異文化(=韓国)理解モデルとしての提示可能性がうかがえる。

問6) (表は略) では、兄弟に関する関心度について尋ねた。偲ぶ会では兄弟に関する本や論文などを1冊以上読んだ人が全体の半分以上を越える58.9%であり、読んだことが「ない」と答えた人が41.1%である。「読んだことはない」と答えた人の中には、「新聞の記事などは読んだことがある」「柳宗悦の関連書で知った」などの意見があった。しかし、高等学校生徒は1冊以上読んだ人が28.4%で、読んだことのない人が71.6%であり、さほど関心が高くないことがわかる。

問7) (表は略) では、兄弟を知ってからの変化について尋ねた。偲ぶ会では、83.1%が「韓国・韓国人についてもっと知りたい」と答えたが、高等学校生徒では36.4%に過ぎず、「どちらとも言えない」の48.3%よりも少ない。これは、偲ぶ会は50代～80代が全体の90.3%を占めて、植民統治期を直接経験したり、体験者の話を聞いたりした世代であり、兄弟の朝鮮理解の特殊性を認識しているが、高等学校生徒は兄弟の朝鮮理解に関する具体的なイメージがないからである。例えば、偲ぶ会ではまず兄弟の生きた時代、すなわち日本の朝鮮植民統治に対する「反省」をし、そのうえ、韓国についてもっと知りたいという意見が多く、兄弟の存在が回答者の韓国認識に影響を与えていることを示した。

問8) 浅川兄弟は植民統治期の韓国で暮らしながら、伝統工芸について研究したり、韓国人と平等に付き合ったりしました。あなたは兄弟のような生き方を実践してみたいと思いますか？	偲ぶ会		高等学校生徒	
	人数	割合	人数	割合
イ) はい	119	68.4%	45	25.6%
ロ) いいえ	9	5.2%	32	18.2%
ハ) どちらとも言えない。	46	26.4%	99	56.2%
合計	174	100%	176	100%

問8) では、兄弟の生き方を実践してみたいかどうかについて尋ねた。偲ぶ会では68.4%の人が兄弟の生き方に共鳴していたが、高等学校生徒では「どちらとも言えない」と答えた人が56.2%で、共鳴している人より多かった。

問9) (表は略) では、特に巧の活動についてどういうことに関心を持って評価しているかを尋ねた。選択項目では、巧の朝鮮理解の特質である自然観や宗教観、工芸観、朝鮮人との交流などについて関心度を調べることにした。「韓国語を習ったり、韓服を着たりして、積極的に付き合ったこと」を評価する人が偲ぶ会では38.8%、高等学校生徒も43.5%と最も多かった。回答者は兄弟の「実践」に関心を持ち、語学学習や衣食住の体験、付き合いなどの自ら実践可能な項目を選んでいることがわかる。

問10) 前の質問に関連して、自分としてはどのようなことをしたいと思いますか？(複数回答可)	偲ぶ会		高等学校生徒	
	人数	割合	人数	割合
イ) 韓国語の勉強を始めたい	31	9.6%	50	13.6%
ロ) 韓国映画・ドラマを鑑賞したい	29	8.9%	33	9.0%
ハ) 韓国の陶磁器や膳などの工芸品を見たい	53	16.4%	21	5.7%
ニ) 韓国旅行がしたい	53	16.4%	93	25.3%
ホ) 日韓の歴史について勉強したい	101	31.2%	51	14.0%
ヘ) 韓国へ留学したい	5	1.5%	11	3.0%
ト) 韓国人の友だちと付き合いたい	40	12.3%	94	25.6%
チ) その他	12	3.7%	14	3.8%
合計	324	100%	367	100%

問10) では、兄弟の実体験のなかに自分がしたいことは何かを尋ねた。選択項目では、巧の朝鮮語学習や朝鮮伝統文化への関心、朝鮮人との交流などの朝鮮理解における「実践活動」の今日的な意味について聞いた。偲ぶ会では「日韓の歴史について勉強したい」と答えた人が31.2%、高等学校では「韓国人の友だちと付き合いたい」と答えた人が25.6%で最も多かった。偲ぶ会の回答者の中には植民統治期における教育などによって被支配者としての韓国に対する偏見があったため、兄弟の朝鮮理解を通して韓日両国の歴史をもっと勉強したいと思うようになったという意見が目立った。高等学校生徒は身近に実行できることとして韓国人との交友関係や旅行を希望する意見が多かった。



問11) (表は略) では、現在実行していることを尋ねた。偲ぶ会では、最も多い「歴史の勉強 (26.8%)」から「韓国旅行 (20.5%)」「韓国人との交友 (17.9%)」「韓国語の勉強 (16.1%)」の順番である。歴史の勉強は韓日両国の関係を知り、友好的な部分を見出したいという希望を強める。そして、この歴史認識は、韓国の伝統文化の固有性を理解できるきっかけとなり、韓国旅行や交友関係に積極的に取り組むきっかけとなっている。さらに、韓国の美術館や博物館、遺跡地めぐりを実行し、間接的に習得した知識ではなく実体験による異文化理解を行なっている。このような実体験は韓国語学習に興味を持つきっかけとなり、韓国人の友だちとの積極的な交流に発展している。

この結果から、兄弟の朝鮮理解が今日の日本人における異文化 (= 韓国) 理解モデルとして有効であることが証明できる。これは、若い世代においても有効である。高等学校生徒の答えには、「韓国人との交友 (25.6%)」が最も多く、続いて「韓国旅行 (25.4%)」で、「歴史の勉強 (13.9%)」と「韓国語の勉強 (13.6%)」が選ばれた。兄弟の朝鮮理解における実体験を積極的に取り入れる若い世代の実行力がうかがえる。そして、兄弟の朝鮮理解が時代を超えて今日の異文化 (= 韓国) 理解モデルとして違和感なく受け入れられていることがわかる。

問12) 浅川兄弟を知らない人は日本にも韓国にもまだ多い です。浅川兄弟が両国に広く知られるようになると、どうい うことが期待できると思いますか? (記述)	偲ぶ会		高等学校生徒	
	件数	割合	件数	割合
イ) 平和	7	6.8%	0	0.0%
ロ) 日韓両国の交流が進む	23	22.3%	15	14.9%
ハ) 信頼感・親しみ・理解が深まる	23	22.3%	5	4.9%
ニ) 日韓両国の親善・友好	30	29.1%	45	44.6%
ホ) 日韓両国が「近くて近い国」となる	18	17.5%	23	22.8%
ヘ) 若い世代の交流・理解への期待	1	1.0%	0	0.0%
ト) 歴史を正しく知る	1	1.0%	7	6.9%
チ) 日本人の韓国への関心が高まる			6	5.9%
合計	103	100%	101	100%

問12) では、兄弟を通して何がかわるか、という質問をしたが、記述にもかかわらず、大きく8項目に答えがまとまった。偲ぶ会では、まず「親善・友好」が深まり、次いで「信頼感が生まれ」、その結果「日韓両国の交流が進む」と、答えの順序が韓国理解の方法を提示するものとなっている。これは、偲ぶ会の異文化理解の勉強の当然の帰結と言えよう。高等学校生徒の答えは、「親善・友好」と「近くて近い国となる」という「日韓関係の改善」があわせて67.4%を占めている。しかし、高等学校生徒の中には、韓日関係が「少し」はよくなるという意見があり、国家間の関係においてはやや悲観的な見方を示した。

以上のように世代間の認識の相違は見られるが、兄弟の朝鮮理解に見られる実体験は偲ぶ会から地元の若い世代に及んで異文化 (= 韓国) 理解モデルとしての意義を持つことがわかった。さらに、兄弟の朝鮮理解は韓日両国の親善・友好における指導理念としてその意義が新たに求められる。

### おわりに

以上、浅川兄弟が植民地朝鮮において朝鮮伝統工芸の「研究者」としての視線のみならず、「生活者」としての視線を保ちつつ、他者 = 朝鮮 (民衆)、異文化 = 朝鮮 (伝統文化) への理解を深化させていったことが、韓国と日本においてどのような意義を持っているのかについて考察した。まず、韓国においては、兄弟の伝統工芸研究の成果が、貴重な史料として活用されつつあり、朝鮮人との交流を通して相互の信頼関係が構築できたことが、若い世代には植民統治期における日本人のもう一つの朝鮮観の発見の手がかりとなっている。他方、日本においては、兄弟の朝鮮人との交流について安倍能成や柳宗悦が異文化 (= 朝鮮) 理解モデルとして認識して以来、今日においても異文化 (= 韓国) 理解モデルとしての重要性を失っていない。

このように、本稿におけるインタビューの証言やアンケート調査の分析結果によると、浅川兄弟の実践型異文化理解モデルは、画一的な情報ではなく、体験学習や情報交換などによって誤解を正し、理性や知識のみならず感性と愛情を生み出すことができる。そして、実践過程において、特に韓日両国の歴史認識における否定的なイ

メージや先入観から脱却し、相互交流の特殊性を克服する可能性を見出すこともできる。

しかし、およそ個人の評価というものは、その基準を変えて見れば決して一様ではない。安倍能成のように巧の「人柄」を評価する者もあるし、柳宗悦のように巧の「朝鮮への愛」を語る者もいる。あるいは、兄弟に対する様々な紹介や評価もが、「日韓交流を進める」という前向きなマスコミ報道もある。反面、巧の評価に対しては憂慮の意見もあり、「神様」とか「賛美」とか「免罪符」などという巧にかかわる「ある種のいやらしさ」を指摘する論者もいる。これは、研究者にとってもその思いの如何にかかわらず、異文化理解に伴う未熟な方法論に対する厳しい批判として心しておかなければならない。

本アンケートの分析を通して、筆者は、浅川兄弟が主張する自立主義と現場主義は今日でも連綿と引き継がれていることを実感した。しかし、本アンケートと比較すべき韓国におけるアンケートの実施が今後の課題として残されている。その課題の中には、兄弟が生きた植民統治期という厳しい歴史的背景に対する韓国人の認識の問題並びに韓国においてアンケート調査が実施可能なほどまだ兄弟の存在が知られていない現状など難しい問題があることも事実である。今後、韓国で巧が紹介された歴史教科書『韓国近・現代史』を用いている学校を中心にデータを収集するなど、若い世代の韓日関係の歴史認識を細かく分析し、異文化理解の方法をさらに研究したいと考えている。

### 【付記】

紙幅の制限があり、アンケートの表の一部を省略した。これらについて、詳しくは、2007年度学位取得予定の博士論文を参照されたい。

### 【謝辞】

韓国の現地調査においてご指導いただいた津田塾大学の高崎宗司先生、インタビューにお答えいただいた韓国の関係者のみな様とアンケート調査にご協力下さった偲ぶ会の清水九規事務局長および参加者のみな様、山梨県立農林高等学校、山梨県立北杜高等学校、山梨英和高等学校の先生方と生徒のみな様、山梨英和高等学校の深澤美恵子元教員に心より感謝申し上げます。

### 註

- (1) 柳宗悦は白樺派の同人として活動し、1914年に浅川伯教に、1915年に弟巧に出会い、朝鮮芸術へ関心を持った。1916年はじめて朝鮮を訪ねた柳は、「朝鮮人を想ふ」(『讀賣新聞』1919年5月)を含む朝鮮関連論文を集めて『朝鮮とその芸術』(1922年、叢文閣)を出版した。さらに、1924年にはソウルの景福宮緝敬堂に「朝鮮民族美術館」を開館した。「民衆的工藝」を略した「民藝」の語を創った柳は、浜田庄司、河井寛次郎とともに1936年、東京駒場に「日本民芸館」を開館した。『柳宗悦全集 22 卷下』筑摩書房、1992年、pp.224 - 297。
- (2) 安倍能成「浅川巧さんを惜む(五)」『京城日報』1931年5月6日。
- (3) 柳宗悦「編輯余録」『工藝』1931年5月号、p.56。
- (4) 梶村彩『日韓交流のさきがけ浅川巧』搖藍社、2004年、p.151。
- (5) 『中学社会 歴史 未来をみつめて』教育出版、2005年、pp.176 - 177。
- (6) 同上書、p.177。
- (7) 瀬祭とは、①カワウソが多く捕獲した魚を食べる前に並べておくのを、俗に魚を祭るにたとえていう語。②転じて、詩文を作るときに、多くの参考書をひろげちらかすこと、である(新村出編『広辞苑』岩波書店)。偲ぶ会の清水九規事務局長によると、初めての浅川兄弟関連資料展において、観覧者が自由に手にとってみるのできる展示を試み、「瀬祭」と名づけたという。

(2008年1月11日受理)